

今春慶応高卒業、4月から慶大野球部

アメフト部から再転身 08年、父・清原氏の引退セレモニーで

花束を持って登場した長男・正吾さん(左)と次男・勝児さん Photo By スポニチ

西武、巨人、オリックスでプレーし、プロ野球通算 525 本塁打を放った清原和博氏(53)の長男・正吾さん(18)が慶大野球部入りを希望していることが17日、分かった。慶応普通部(中学)―慶応高の6年間は他球技でプレーしていたが、今春の慶大進学を機に、父が一時代を築いた野球を選択。周囲からの反響は覚悟の上で、神宮球場でのプレーを目標に東京六大学の名門に挑む決意を固めた。

正吾さんはかつて少年野球チームでプレーし、父親譲りの恵まれた体格で右打席からパワフルな打球を連発していた。ただ、中学はバレーボール、高校ではアメリカンフットボール部に所属。6年間、白球から遠ざかっていた。それでも野球への情熱は衰えていなかった。他球技でプレーする傍ら、清原氏に高校時代、LINEでアドバイスを求め、自主練習を積んだ。神宮での早慶戦も見学。今春からの内部進学を前に熟考した末に野球を選択し、大学側へ入部希望の意向を示した。

中高6年間、他のスポーツに取り組みながら、東京六大学で野球をすることは異例。ただ、現役時に1メートル88、104キロの体躯(たいく)を誇った父と同様、身長1メートル90近い正吾さんの身体能力やパワーは桁外れで、現役の学生野球選手にも引けを取らないという。既に外野での守備や打撃の基礎プレーを複数回、視察した慶大野球部・堀井哲也監督は「体育会野球部として入部制限はない」と話し、支障は見当たらない。

とはいえ、入部後は険しい道が待ち受けている。3季ぶりのリーグ制覇を目指す慶大は主将の福井章吾捕手(3年、大阪桐蔭)や今秋ドラフト候補・正木智也外野手(3年、慶応)ら甲子園経験者らがズラリ。長いブランクと闘うハンデは大きく、4年間、リーグ戦に出場できない可能性もある。試合に出場するメンバー入りへの道のりが過酷である上に、プロで偉大な実績を残した父と比較されるのは覚悟の上で入部する。堀井監督は、本人の話しぶりなどから「強い決意を感じた」といい、その挑戦を受け入れた。清原氏も「彼の男としての覚悟と決断を尊重したい」と背中を押す。正吾さんは現在、慶応高の卒業試験へ猛勉強中だという。大学側も、グラウンドのある横浜市は緊急事態宣言下とあり、合流時期は未定。晴れて一部員として活動できるのは、自粛期間が明けてからになる見通しだ。

《米ではアメフトと野球の二刀流も》米国では高校までの部活動は季節に応じて複数のスポーツを掛け持つのが一般的。秋はアメフト、冬はバスケットボール、春は野球、という具合だ。多くの種目を楽しんでバランス良く鍛え、適性も把握できる。特にアメフトと野球は親和性が高いことで知られる。NFLとMLBの二刀流だったディオン・サンダース、ポー・ジャクソンの他に、近年でもシーホークスのQBラッセル・ウィルソンら、NFLとMLBの両方からドラフト指名される学生もいる。

《次男は現中3で小6時巨人Jr》清原氏の次男・勝児さんは現在中学3年生で、小6時の17年には札幌ドームで行われた「NPB12球団ジュニアトーナメント」に巨人Jrの一員として出場。父や兄と同じ右投げ右打ちで、「4番・一塁」で2試合に出場も無安打に終わり、準決勝進出はならなかった。中学時代は世田谷西リトルシニアに所属。清原氏は昨年6月のスポニチ本紙インタビューで「中3の時の自分と比べても技術的にはいいものがある」と話していた。

【主な元プロ野球選手2世の現役アマ選手】☆今年も期待の高校生 元広島外野手・前田智徳氏の次男・晃宏は慶応(神奈川)の2年生投手で、1年時から公式戦で登板している。元オリックス投手の野田浩司氏の長男・泰司朗は甲南



(兵庫)の2年生内野手。元日本ハム外野手の坪井智哉氏(現DeNA打撃コーチ)の長男・洸之介は創志学園(岡山)の2年生で、外野手としてプレーしている。☆内野手一家 元ヤクルト内野手の度会博文氏(現球団スカウト)の長男・基輝は中央学院大の3年生内野手で、次男・隆輝は横浜(神奈川)の3年生内野手。☆昨年ドラフト候補 元阪神内野手の関本賢太郎氏(本紙評論家)の長男・勇輔は履正社(大阪)の3年生捕手。昨年10月のドラフトでは指名がなく、大学に進学予定だ。

スポニチ ヤクルト ドラ1木沢

2021年1月18日

「クレメンスになりたい」、MLB354勝右腕理想に40代まで剛球を



ブルペンで投球練習をするヤクルト・木沢 Photo By 代表撮影

ヤクルトのドラフト1位・木沢尚文投手(22=慶大)が17日、埼玉・戸田での新人合同自主トレで初のブルペン投球を行った。高津臣吾監督(52)が見守る前で、立った捕手を相手に力強い球を16球投じた。最速155キロ右腕は、大リーグ通算354勝のロジャー・クレメンス氏(58=元レッドソックス)のように、**40代まで剛速球を投げ続ける本格派を目指す**と宣言した。

ダイナミックなフォームから、球質の重そうなボールがミットに収まる。木沢がドラフト3位の捕手・内山(星稷)を相手に16球。「8割くらい」という力加減でも、球威は十分だった。進化の先に目指すのは、往年のメジャーの剛腕だ。

「ロジャー・クレメンスみたいな投手になりたい。昔の向こうの本格派ピッチャーに憧れる。マウンドの立ち居振る舞いだったり、堂々としていてロマンを感じられる投手」

通算354勝を挙げ、歴代最多7度のサイ・ヤング賞を獲得したクレメンス氏を理想とする。レッドソックスやヤンキースなど大リーグで24年活躍。「ロケット」の愛称で親しまれた、大リーグを代表するパワーピッチャーだ。40代になっても160キロ近い剛速球を投げて相手をねじ伏せた姿を動画で研究している。「パワーピッチャーで長く現役を続けられたことには絶対に理由がある。負担のないフォームで力強いボールを投げられるところが目指すべきところ」。45歳まで第一線で活躍した右腕は最高の手本。自身は「ケガが多かったですけれど、その分勉強もしてきた」とプロ野球人生を見据えて知識も蓄えている。

昨年12月30日以来というブルペン投球を、高津監督も視察。「力で押す、真っすぐで空振りが取れることは、プロの世界でも難しいけれど、彼にはその素質がある」とパワーピッチャーとして期待する。キャンプは1軍スタートが濃厚なルーキーは「自分も本格派投手として太く、長く生きられるように目指していきたい」と力強い。ロマンある投手を目指し、早期アピールで「ロケットスタート」を切る。

(青森 正宣)

◆木沢 尚文(きざわ・なおふみ)1998年(平10)4月25日生まれ、千葉県出身の22歳。船橋二宮小6年時にロッテJr入りし、藤平(現楽天)らと12球団ジュニアトーナメントを制覇。慶応高では甲子園出場なし。慶大では2年春にデビューし、通算23試合で7勝2敗、防御率2・98。3年秋に明治神宮大会に出場した。1メートル83、85キロ。右投げ右打ち。

◆ロジャー・クレメンス 1962年8月4日生まれ、オハイオ州出身の58歳。テキサス大から83年ドラフト1巡目(全体19番目)でレッドソックス入団。1試合最多となる20奪三振を2度(86、96年)記録。愛称は「ロケット」で、最初の20奪三振達成試合で客席のファンが「ザ・ロケット・マン」と書かれたプラカードを手にしてるのがきっかけ。ブルージェイズ、ヤンキース、アストロズなどでプレー。通算354勝、歴代3位の4672奪三振。サイ・ヤング賞は史上最多7度で、最多勝4度、最優秀防御率7度、奪三振王5度。右投げ右打ち。

Copyright © SPORTS NIPPON NEWSPAPERS. All Rights Reserved. Sponichi Annexに掲載の記事・写真・カット等の転載を禁じます。すべての著作権はスポーツニッポン新聞社と情報提供者に帰属します。

(黄地紋・林 莊祐)